

《講演録および史料紹介》上原敏の軍事郵便について

新井 勝 紘
(文学部教授)

ただいま紹介いただきました専修大学の文学部で日本の歴史、とりわけ近代史を教えております新井と申します。よろしくお願いいたします。

上原敏の経歴を見まして僕との縁があるとすれば、上原敏は一九四四年、西ニューギニアの密林の中で消息を絶つ訳であります、ちようどこの密林で消息を絶った頃、私は生まれました。昭和一九年八月の生まれであります。戦争の非常に厳しい時代に生まれました。私の親父も二回ほど戦争に行っておりまして、もう勝つという雰囲気はなかったんじゃないかと思うんですが、僕は長男で生まれました。勝つけど勝紘と名付けられました。「勝」はわかるんですけど、「紘」は今の学生に「八紘一字」の紘と言ってもほとんど通用しません。戦時中まさにギリギリに生まれた名前なので、その後も年齢は誤魔化せないのです。本年(二〇一四)、七〇歳という年齢を迎えて、今年度で専修大学を定年になるという、そういう者であります。

本日の私の話のテーマは、展示もされておりました軍事郵便にな

ります。今、日本で軍事郵便と言ってもなかなか若い人たち、とりわけ学生諸君にはわかってもらえません。私はいつも講義で軍事郵便を学生に読ませているんですけど、平成生まれの今の学生にはもう古文書ですね。ほとんど読めません。漢字のいくつかは読めるところがあるんですけど、文章にはなっていないし、虫食いなどの穴あきのものもあります。七〇年ほど前の学生たちの曾祖父くらいの方が書いた手紙が、もう孫や曾孫には読めないという現状になっております。

なぜ軍事郵便を取り上げているかというと、軍事郵便というものが、日本では戦争を考える時にこれまであまり評価されていなかったからです。なぜ評価されていないかと言うと、まったくの個人の手紙であること、それからもう一つは、やっぱり検閲をされているということです。ね。検閲をされているということは本心を書けない。軍事郵便を読むと、たいいてい「私も軍務に精励しております」という、まずこういう決まり文句が多いんです。軍事郵便の多くはそういう内容の手紙です。完全なプライベートな手紙をいくら読ん

でも、戦争のことがわかる訳がないということをよく言われました。

私、実は軍事郵便を個人的に集めているんです。日本の博物館の中で、国立、都道府県立、市町村立の博物館も含めて軍事郵便を集めているところがないんですよ。どこにもありません。ヨーロッパにはさすがにあるんですね。ドイツの軍事郵便を研究されている方に聞きましたけど、ドイツは国家的プロジェクトとして戦時期の兵士の軍事郵便をちゃんと集めて保存・整理し、それを見たいという人には公開しているんです。日本は残念ながら国立の博物館も都道府県立の博物館も、もちろん市や町などの博物館なども、寄贈された軍事郵便は若干あるんですけど、それを集中して集めているところはありません。

そういう現状の中で、個人的に集め始めたのです。たいして集めている訳ではないんですけど、それでもここ二〇年近くで一万通以上は集めました。講義では、その一万通の中から少しずつ、学生に読ませております。

日本において軍事郵便制度が本格的に始まったのは一八九四年です。明治二十七年、日清戦争の年ですね。日清戦争の時から日本では軍事郵便の取扱規則が出来て軍事郵便が始まる。その前の戊辰戦争とか西南戦争とか、そういう時代に軍事郵便制度はありません。最も軍事郵便の制度が確立したのは一九〇四年、始まってから一〇年後ですね。この年、日露戦争が始まりました。この時に軍事郵便規

則というものが出来まして、各地に野戦郵便局が出来ました。それが最終的には一九四五年、昭和二〇年の八月まで続いて、多くの手紙がやり取りされました。戦後はもちろん軍事郵便制度というものはございません。

ですから日本の近代史の中でも、ある時期だけしか軍事郵便はやり取り出来なかった訳ですけど、どのくらいの数の軍事郵便がやり取りされたんでしょうか。日清戦争の時は内地から七〇〇万通くらい、戦地からは五〇〇万通くらい、計一二〇〇万通くらいありました。これが日露戦争になると一気に飛躍的に伸びまして、内地からは二億二〇〇〇万、戦地からは二億三〇〇〇万で計四億五〇〇〇万。四億五〇〇〇万通の手紙が戦地と国内の間を行き来しました。物凄い数です。現在、配達されている手紙の数は確認していませんけど、今の自分たちのことを考えても、僕が父親・母親などに宛ててまともに手紙を書いた記憶はないですね。小学生の時に修学旅行に行ったとか、林間学校に行った時に、無事に何とか着きましたっていうような手紙を書いた記憶はありませんけど、大人になってから両親や兄弟にまともに手紙を書く機会はなかったと思います。

しかし、軍事郵便世代では、おそらく戦争に行った農村の青年たちは、初めて親や兄弟、あるいは親戚や学校の先生などに宛てて手紙を書いた訳です。それも何億という数の手紙をしたためたというこの経験は、いろいろな意味で凄く大きな経験ではないでしょうか。

そのあとの日中戦争とかアジア太平洋戦争の時、実は昭和一七年以降はきっちりとしたデータは掴みきれいてませんが、大体三億か四億通だろうというふうに考えて良いと思います。例えば四億通あったとして、果して四億通の手紙を検閲出来たのか。軍事郵便を見ますと検閲をした人の判子が押してあります。朱で「軍事郵便」って書いてないと、それは軍事郵便として取り扱ってくれません。

軍事郵便は、兵士が戦地から国内に送る手紙には料金はかかりません。無料です。ただし国内から戦地に宛てる手紙は切手が必要でした。つまりお金がかかります。若干、枚数の制限はあったようですが、兵士は家族などには無料で出せた訳であります。

その戦地からの億の単位で出された手紙を果たして一通一通、その内容を読んでこれはマズイとかこれは消せとか、これは書き直せとか、現実的にはやってられないのではないかと、僕は今のところ推測しています。「検閲済」と判子は押してあるけれども、明確にきちつと中身までチェックはされていないのではないかと考えています。とりわけ封書の場合はいちいちそれを開封して、中身までチェックすることは、物理的にも無理だったのではないかというふうに、今のところ思っております。

そうすると、検閲はありますよというプレッシャーというか、見えない圧力がかかっているとは思うので、この戦争はもうすぐ負けんじゃないかと、そういう悲観論は書けないとしても、自分の

素直な気持ちを、肉親や妻や子供や恋人など親しい人に宛てて、何とか伝えていたのではないかと考えられるんです。それも一通二通だけだとなかなかそれは読み取れないですけど、一人の兵士がだいたい何十通と、あるいは何百通と書いています。最も多い人は、別に記録がある訳ではないけど一六〇〇通という人がいました。自分の奥さんに宛てて毎日書いている。もう日記のように書いています。この一六〇〇通の軍事郵便は、既に解読されて本になっています。一人の兵士の一〇〇通とか二〇〇通とかの手紙を読んでいくと、何か伝えようとしていたことが読み取れます。単に「軍務に精励しています」という決まり文句だけではなくて、その時の気持ち、感情、あるいは戦場で見たこと聞いたこと、自分が感じたことなどを故郷の人々に伝えたいという兵士の心情に触れることがあります。また故郷の人々は、その手紙を見てまた何らかの手紙を書くという、そういった兵士と故郷、戦地と銃後を結ぶ唯一のコミュニケーション手段が手紙だけだった訳です。今なら携帯があります。が、当時は手紙しかない訳です。だから、「手紙が来なくなったら死んだと思ってくれ」という内容のものをみる必要があります。これが届かなくなつたということは戦死したと思ってくれということなんです。ある意味で、自分は戦場にいるけどもまだ生きてるんだということを知内の人に、あるいは肉親に知らせる「命の便り」と言っても良いかと、私は思っています。

そのように軍事郵便をいくらか読んできた経験から、そんなこと

を感じました。軍事郵便は決して決まり文句だけを書いているのではなくて、戦地からの兵士のある悲痛な思いや叫び、あるいは熱い想いといったものを読み取ることが出来るのではないかと現在では思っています。だから学生諸君にも、軍事郵便というものはただ文字づらや文章だけを読むではなくて、ひよっとしたら書けなかったことを、何かちよっと書きたかったけども、ここには表現出来なかったことまでも含めて深読みすべきだと言っています。それが出来ないと、軍事郵便をちゃんと読んだことにはならないんじゃないかってことを、指導しながら共に読んでいます。

最も最前線にいた兵士たちの戦争体験の実態が書かれた膨大な量の手紙が残っている。一人の兵士がどのような戦争体験をしたのかわけでなく、その数百万倍の人々の体験の積み重ねを捉えないで、日本の戦争体験というものは語れないんじゃないですか。そういう意味では軍事郵便は大切です。戦争体験をどう次の世代に伝えていくのか。戦争記録とか記憶とか言い方がありますが、兵士たちにとっては、自分の体験を文字にするということが記録であり、記憶でもあります。彼らにとっても初めての経験だったと思います。だいたい故郷から出たことのない人が、軍隊というところに入ってから初めて外に出る。それも初めて海外に行き、非常に厳しい戦いのなかで、落ち着いた時間にふと故郷のことを思い出す訳です。みんなどうしているかなあという望郷の念に駆られると思います。そういう時に自分の気持ちを文字で著す、文章にするという体験をした

のではないのでしょうか。自分の感情を文字にする、それも一つの戦争記録と言えるのではないのでしょうか。

でも戦地において軍事郵便が来ない兵士もなかにはいるんですね。肉親の人が筆不精だったのかもしれないけど、そういう人は非常に落ち込むんですね。お前のところは今回も来なかったね、なんて同情しながら気を遣ってくれる兵士もいます。俺の手紙でもよかったら読めよと、回し読みをするんだそうです。

また逆に受け取ったほうの側も受取人だけが読むじゃなくて、宛名がお母さんであつても子供に読ませるし、おばさんやおじさんにも読んでもらう、戦地からこんな手紙が来たよ、まだ生きて頑張ってるよということ、銃後の側でも回し読みをするということが行われていました。なかには、文字が読めない子供に読み聞かせてあげてくださいというふうに、手紙の最後に書いてあるものもありました。それから国内の様子を聞いたりもしています。今年豊作かねえ、どうかねえとか、近所の誰々はどこに行ったとか、あるいは赤紙が来たかとか、そんなことも書いています。また、戦地の厳しい戦いの中でどんなことを経験したのかなんてことも、正直に書いているものもあります。

現在のように一日や二日で手紙が届く訳ではないんですけども、一週間とか一〇日とか長くても一月はかかりません。そのくらいの時間差で戦地の情報と国内の情報が、それなりに伝わっていたと思います。リアルタイムで今の国内の状況がどうなのか、空襲が激し

なくなってきたよというふうなことも含めて、お互いの情報というものを両方で共有していた。戦地と銃後の戦争体験の共有化と言ってもいいかと思っています。そういう意味で、軍事郵便というものは大事な戦争史料だと思います。

ここで上原敏さんの軍事郵便を紹介します。展示してありますが、小さなもので、なかなか読みづらいと思いますが。まずは①②が、お子さんに宛てた手紙です。子供に宛てる手紙には漢字は使わないで、すべてカタカナで書いています。こういう手紙は他の人にも多いですね。①「ヨウコサンエ、オカアサンノオテガミデ、ヨウコサンガヨウチエンニイツテキルコトヲシリマシタ。ゲンキデキマスカ。センセイノオツシヤルコト、ヨクキテキルデセウネ」。セウネとは昔の言い方ですね。「ミナミノモリノナカラオフネニノツテキマシタ。ココニバナナモタクサンアリマス。トウキヨウハサムイソウデスガ、コチラハトテモアツイトコロデス。オトウサンハマタクロイヘイタイサンニナリ、ゲンキデス。アキオトヒロユキニヨロシク。ヲヂサンニモレイコヲバチヤンニモヨロシク」こんな手紙です。ご長女の陽子さん宛てですね。②もカタカナだけです。で陽子さん宛ての手紙であります。

それから③は奥さんに宛てたのだろうと思います。「略、写真入の手紙二通今入手した。夏に出したものが今で、此の間の番号の入ったのが先に見た。前渡した手紙で又其の感情の変遷も妙に微笑しいもので有る。前渡した事も思ひ新たなもので、新たな激励の意味

にもなる。「隣組だより」も楽しく反読して見る。此方から思ひ付きの心算りで「たより」を出して見た」。このように「隣組だより」なんていうものも、わざわざ送っていたんですね。隣近所の人情報でしょう。こうしたものを兵士は喜ぶんですよ。

それから全部読む時間はないので⑤にいきましょう。真ん中あたりです。「もう間近で此の土地も去るが、今度はもう一個処で受取れるかも解らない、後は如何なるか、早く一度子供達の写真は入手し度いものだ」。もう子供のことをしょっちゅう言ってます。子供の写真が来ないことにイラついてますね、送って来ないことを訴えています。

では配布したレジュメの三枚目を見てください。⑥のちょうど真ん中よりちょっと下くらいですかね。「真黒になつて今の仕事に励んで居る、密林の中で廿日間許り大腸炎をやつて、全然骨と皮に成つて仕舞つたのが、一日寝た切りでやり通した」。ちょっと病気になるって骨と皮だけになっちゃつたと、密林の中にいる彼の最後のほうの手紙でしょうが、こういうことが書いてあります。それからその下の⑧も最初は子供たちの写真云々と書いてますね。それから上のほうの左の⑦の四行目「一寸泪ぐんで見たり。子供達元氣の様子で、密林から出て明るい今の処に来て尚更に今日は好い日だと楽しんで居る」。ここでも子供たちの写真のこと、あるいは子供たちが元氣かどうかということを言っております。このようにお子さん、陽子さんが長女で、その下に、明生さん、浩行さんとおられたよう

であります、この三人のお子さんのことを彼は、戦地で熱い想いを抱きながら子供の成長を楽しみにしていたのではないかと思えます。その彼の切ない想いを断ち切ってしまったのが、ニューヨークの密林の中での戦死の知らせだったと思います。

最後に、上原敏の歌のことに触れます。実は彼は戦争に行く前に、展示会場にも「便りもの」というふうの説明がありましたけど、何とか便りといったものを複数歌っていますね。正式には何曲あるか知りませんが、正に軍事郵便を歌にしていたと言えます。
『歌う軍事郵便』と言ってもいいのではないのでしょうか。

ここでは『南京だより』と『上海だより』という二曲を紹介します。

南京だより

作詞…佐藤惣之助

- 一、母アさんお手紙有難う 僕も負傷はしましたが
なんのこれしきかすり傷 日本男児の名誉です。
- 二、敵の南京打陥とし 一番乗りをした時にや
男と生れたうれしさに 母アさん僕は泣きました。
- 三、褒めて下さい、戦友の 仇は見事に討ちました
今ぢや元気な鼻唄で 進軍ラッパを待つてます。
- 四、髪も刈ります髯も剃る 若い戦友は床屋さん
僕は炊事で握りめし 豚の丸焼得意です。
- 五、春が来ましたおア母さん 支那の楊柳はなびいても
東洋平和がくるまでは 僕は断じて帰りません。

上海だより

作詞…佐藤惣之助

- 一、拝啓、御無沙汰しましたが 僕もますます元気です
上陸以来、今日までの 鉄の兜の弾の痕
自慢ぢやないが見せたいな。
- 二、酷寒零下の戦線は 銃に氷の花が咲く
見渡す限り銀世界 敵が頼みのクリークも
江南の春未しです。
- 三、隣りの村の戦友は 偉い元気な奴でした
昨日も敵のトーチカを 進み乗取り占領し
土鼠退治と高笑ひ。
- 四、彼奴がやれば僕もやる 見てろ、こんどの激戦に
タンクを一つ分捕つて ラヂオ・ニュースで聞かすから
待つて、下さい、おア母さん！

『南京だより』の最後の歌詞「僕は断じて帰りません」というところがちょっと悲しいですね。結局彼は帰って来なかったということになります。こういう歌を戦地に行く前に吹き込んでレコードにした彼が、ついに自分は帰って来れなかった。どういう想いで最後亡くなったのかなあとその気持ちを考えてしまいます。想像するしかないんですけど、非常に辛いものがありました。

『上海だより』は皆さんご存知でしょう。最後は「待つてくさいお母さん」という歌詞で終わる訳ですが、これも結局、彼自身

はお母さんのもとには帰れなかったという厳しい現実を私達は知っている訳ですが、一層辛い気持ちを抱いてしまいます。

軍事郵便を読む時に、いつも学生には肉親以外の者が読むのは君らが初めてだよと言います。だけど手紙だけではこの兵士が本当に帰ってきたのかはわからない。戦死しているかも知れない。もしそうならこの手紙が絶筆ということになる。そのことを想いながら是非読んでみてくださいと言うと、それなりに学生の間にも真剣さが加わってきます。時間がきてしまいました。大変まとまりのない話になってしまいましたけれども、僕の話が終わらせていただきます。ありがとうございます。

《史料紹介》 上原敏の軍事郵便と中国慰問日記

(1) 軍事郵便

①

東京都杉並区荻窪二丁目二〇八番地 上原敏方

マツモトヨウコサマ

南海派遣暁二九四六部隊 門家隊 松本力治

ヨウコサンエ、

オカアサンノオテガミデヨウコサンガヨウチエンニイツテキルコト
ヲシリマシタ。ゲンキデキマスカ、

センセイノオツシヤルコトヨクキイテキルデセウネ、ミナミノリ
ノナカカラオフネニノツテキマシタ。

ココニハバナナモタクサンアリマス。トウキヨウハサムイソウデス
ガ、コチラハトテモアツイトコロデス。

オトウサンハマタクロイヘイタイサンニナリ、ゲンキデス。アキオ
トヒロユキニヨロシク、ヲヂサンニモレイコヲバチヤンニモヨロシ
ク。

②

東京市杉並区荻窪二の二〇八 上原敏方

松本陽子様

比島派遣暁第二九四六部隊 門家隊第三区 松本力治

ヨウコサンハオゲンキデスカ。ハシカハナホリマシタカ。

アキオトヒロユキハナキマセンカ、

オネエサマハ、フタリヲカハイガツテクダサイ、

オトウサマモカゼガナホツテ、トテモゲンキデス、

トナリグミノヒトニヨロシク

③

東京都杉並区荻窪二丁目二〇八番地 上原敏方

松本澄子様

南海派遣暁二九四六部隊 門家隊 松本力治①

略、写真入の手紙二通、今入手した、夏に出したものが今で、此の
間の番号の入ったのが先に見た。前渡した手紙で又其の感情の変遷
も妙に微笑しいもので有る。前渡した事も思ひ新たなもので、新た
な激励の意味にもなる、「隣組だより」も楽しく反読して見る、此
方から思ひ付きの心算りで「たより」を出して見た。赤石君にも
出したが大喜びだらう。男児二人は手柄だから。前に出したのは
「密林から出て都に」と書いたが、今度は又都から尚進んで「涼風
の吹く都」に高原の涼風に幾分落着いて居る。

④ 東京都杉並区荻窪二丁目二〇八番地 上原敏方

松本澄子様

南海派遣暁二九四六部隊 門家隊 松本力治②

明生と陽子と二人の写真は出て居るが、浩行の有る写真が雨に濡れて駄目になつて居る、残念な事で有る、元氣元氣と皆んな尚ほ元氣で、今年も好い年を過し、好き新年を迎ひます様に遙かより祈つて居る、自分等も此処で年を過し、新年を迎へる事と思ふ。隣組長様にも出したが、隣組の皆様宜しく御挨拶を申上る様に、最も此の手紙は年賀にも間に合ふまいが

⑤ 東京都杉並区荻窪二丁目二〇八番地 上原敏方

松本澄子様

南海派遣暁二九四六部隊 門家隊 松本力治

略、手紙は①②③、他一通と殆んど入手した様だが、其の写真とヒコー便の返事が来て無い。写真在中とでも有つたら嬉しいが、もう間近で此の土地も去るが、今度はもう一個処で受取れるかも知れない、後は如何なるか、早く一度子供達の写真は入手し度いものだ。

明生は目下外交。。。たれか、高橋様相変わらずか、一度は手紙差上げたが能力、又書続はするが忙しくなつたら全然思案かないから、お前の手紙を楽しみにして居るよ、豊作さんや赤石さんには変り無いだらうね

⑥ 東京都杉並区荻窪二ノ二〇八 上原敏方

松本澄子様

南海派遣暁二九四六部隊 門家隊 松本力治

書信有難う、色々な都合で丁度手紙の出せる処、又手紙の来て居る処に廻つて来て、嬉しい氣持で見た許りで有る、洋間の地図で見た地点に行く途中で有るが十二月とを言ふに本当に暑い処だ、今迄の密林の中と違つて建設の音、爆音に始終して居る。又真黒になつて今の仕事に励んで居る、密林の中で廿日間許り大腸炎をやつて、全然骨と皮に成つて仕舞つたのが、一日寝た切りでやり通した。此処に来る前には特別な任務で一月許りカナカ土人と愉快な日を過したり、割合に張りの有る日を送つた、丈夫だくと皆んなに言はれて妙な感じを持つて居る、強いのかも知れない、とても好く喰べるし、今は相当に太つて、自分乍ら好い氣になつて居る、力を蓄へないといざの時に困るから。

①

⑦

東京都杉並区荻窪二の二〇八 上原敏方

松本澄子様

南海派遣暁二九四六部隊 門家隊 松本力治

①今日は神田の清水からの手紙と会社の衣笠さんの手紙、君からの手紙等々読んで仕舞つてほつとした処、一寸と泪ぐんで見たり。子供達元氣の様で、密林から出て明るい今の処に来て尚更に今日は好い日だと楽しんで居る。伯父さんが来て呉れて非常に安心して居る、色々御願ひして宜しく頼みます。伯父さんの国民服姿が見えるよ、

玲子も屹度動つた事と思ふが、体の具合等は如何かな。炬燵に入る時季かな。耳の傍で蟬が泣いて居るよ、夜は蛍がとんで居るのに、愉快だ、蚊帳を楽しんで居るのに。冬の便りとは、オーバーの季節か、人生は浮世と言ふ訳か

⑧

東京都杉並区荻窪二丁目二〇八番地 上原敏方

松本澄子様

南海派遣暁二九四六部隊 門家隊 松本力治

③子供達の写真は仲々手に入らないが送つて呉れたかな、写真と言

へば第一線で参謀本部の写真班の撮つた写真が、或は戦事展に出るかも知れない、当にはならないが、屹度家には送つて呉れる事と思ふ。此の土地に来て幾分落着いて貯金と送金をした、何日に到着するかは解らないが送金の分は宜しく処分して呉れ、会社の事は衣笠さんや長沢さんの手紙で解つた、服部さんには呉々も宜しく頑張つて下さる様にとお伝ひして呉れ、猪脇さんにも手紙は精々出して呉れ、何ヶ月も纏つて手に入る事が此方の不便で有るが来て居る予想が又楽しい事なのだから。

⑨

東京都杉並区荻窪二の二〇八

松本澄子様

南海派遣軍暁二九四六部隊 門家隊 松本力治①

冠省、皆んな元氣な御正月を迎へた事と思ふ、美味しいお餅に自分等も第一回の御正月を過した。溜らなく美味しいおしるこで有る。陽子、明生、浩行夫々元氣だらう、陽子は学校に上る希望の年だ、幼稚園の効果は有つただらう。今度は明生か。発熱もせず此処を懸命に頑張つて居る。案外頑張れるもので有る。東京都の演芸界の報が知り度いもので有るが都新聞かが有つたら都合して呉れ。会社の芸術家も動いて居る事と思ふが、毎日出して呉れる筈だが殆んど手に入らないもので頼りないものだ、まして此処迄はね

⑩ 東京都杉並区荻窪二ノ二〇八

松本澄子様

南海派遣隊二九四六部隊 門家隊 松本力治②

昨年の十二月廿五日で「契約期間の限り」で有った筈だか、服部様にも「はがき」で差上、相談申しましたし、余り御世話のなり放しでもいけないから打限りなら、それに話をして置いて呉れ、取紛れて忘れて居た、

⑪ 東京都杉並区荻窪二丁目二〇八番地 上原敏方

松本澄子様

比島派遣隊第二九四六部隊 門家隊四ノ一 松本力治

先日ノ航空返信拝見シマシタ。二枚出シタガ一枚ハ如何シタデセウ、相変ラズ何時モ夏ノ如ク流汗ノ日々ヲ過シテ居ル。ダガ元氣ニ勤務ヲ続ケテキル、丸山大佐殿ニモ手紙ヲ差上ゲタシ、山崎様ノ宛名ヲ早く知ラセナイト困ル、折々大中会ノ方々ニモ書信スルガ先ヅ現況ヲ報告シテ置イテ下サイ、鈴木正、宮沢サン、北海道等、秋田等願ヒマス、明生ノ事が書イテナカッタガ、皆ンナ変リナイ事ダラウ。アレ以後ノ子供ノ写真等有ツタラ送ツテ呉レ、

バレーノ替刃モ願ヒタイ、山崎サンニデモ頼ンデ見タラ出来ナイカナ、ヒコーキニ乗セテモラツテ。オ国訛リガナツカシヤデ国ノ人バカリ面白イ事ダ

銀座事ム所長沢サンニオ手紙ヲ下サル様ニ電話デモシテ下サイ、君栄サン御夫妻ニモ頼ンデ下サイ、三丁目君ニモ是非連絡ヲスル事、事ム所ニ聞ケバ直グ解ル、荻野サンノ状況等色々ト最近ノ会社ノ状況ハ如何、纏ラナイ事ヲ書キマシタガ宜シク頼ミマス。

⑫ 東京市杉並区荻窪二丁目二〇八 上原敏方

松本澄子殿

比島派遣隊第二九四六部隊 門家隊第三区 松本力治

風邪にやられたが快癒して、愈々張りの時です、皆んな変り無い事と思ふ。元氣で居る事を皆々様、隣組の方々に御伝ひ下さい。

雨季になり、又意外に住み好い処で、田舎を想ひ出させる。

秋田市入谷君の処に送つた事と思ふが。バレーの替刃を三包許り完全に包装して至急送る様に、次いでに禪も有ると助る。では後元氣で頼みます。

(出来たらヒコ便で)

敬具

(2) 中国慰問日記

※この日記は平成三年に「大館上原敏の会」が刊行した創立十周年記念誌『歌手上原敏 彗星のごとく』に「遺稿」(抜粋)として収録されたもので、今回の調査では、原本の所在について明らかにすることはできなかった。しかし当時の芸能人による戦地慰問について詳細に知ることのできる貴重な日記なのでここに紹介する。

中国慰問団『青空一座』

昭和十三年三月十三日

三時東京駅出発。広島宇品迄は殆ど寝をとらず、だが一同割合元氣、宇品港萩中旅館にて休む。されど新聞社写真班の為休息出来ず。中国新聞、上海支社等も来る。

広島司令部親切にて無事、北進丸に三時過ぎ乗船、五時十分出港、船中晚餐後の八時、演芸合戦の申込あり、勇躍対抗、山中みゆき女史の「にくいわね」大受けて喝采、続いて染千代ねえさんも大喝采を浴びる、敏は疲れて楽しからず、然し愛国行進曲で頑張る。

兵隊さんも流行歌あり、民謡ありで盛会、初回で疲れたけれど船中演芸合戦も閉幕となる、今迄此のような慰問を受けた事が無かったと、榊原船長も感謝してくれる。

三月二十日

平穏な船旅である。夕暮の景観絶佳なり、河崎部隊の名譽の戦死者の遺骨護送者、石川伍長殿と近付きを得る、私達に何をか願ってくれる、酒の上とは言え実に実ある事を教えてくれた。皆さん一行の使命は、戦線勇士の慰問だろうが、彼地に戦死された名譽ある勇士の墓標をも慰問して欲しいと、固く願ってくれた、そこ迄は考えも及ばなかった事を反省した。

三月二十一日

強風雨ありの予報有り、後、海大荒れとなり船酔の一日となる。船中殆どやられた模様、気まぐれにレコードを掛けるが仲なか治まらず、石川伍長殿と一席語り合う、東京に帰り一緒になれたら、其の折お茶を飲もうと約束をする。

三月二十二日

今日も波高、船酔には割合慣れたが流石に苦しい、夜七時より第二回目の演芸会あり、兵隊さん二十名近く出演十一時頃迄延び、やがて我等の出番である。

みゆき女史、裏芸の「琵琶」叩きを演ずる、素人裸足の腕前大受け、他一座の画面も得意芸を披露す、十二時終了、明朝は上海沖着、一同緊張す。

三月二十三日

上海上陸、兵站部の三浦少尉等がこれからの旅行を案内すると云う、揚子江岸から見る眺めは如何にも大陸らしい眺望である、寝不足気味の我等も兵隊さんの親切と、微笑む童顔に嬉し涙し、興

奮する。

休めると思って居たが、この日も七時から公演との事、驚いたが仕方なし、敏は疲れて「ダメ」をかこう、でも上海第一回公演は好評裡に終了す。

三月二十四日

寝不足、二時と七時に、たづみ部隊で公演、バラックの大講堂に三千人程の兵隊さん、一同張り切る、夜音楽学校跡にて公演、設備は良し、マイクは駄目だが環境は良く、楽に出来、また大張り切り、最後の万歳を三唱で、涙が出て泣き出してしまった。

三月二十五日

午後、まず戦没勇士の遺骨堂に参詣、妙にしんみりしてしまつた、其の日の公演は、広い場所で、声が通ると思えない、ぎんなみさんの手踊りを特別出してもらつたら割合元気に始められた、最後に露営の唄を合唱したら、みんな泣き出してしまつた。

三月二十六日

二時松江に向う、始て支那の汽車にゆられる、車中兵隊さんに「南京だより」を教え込む、途フランス租界で沢山の支那人の姿を見る、到着後、松江神社に参詣、激戦地上海コーブンシヨカンを観る。

三月二十八日

松江最後の日、一日三回の公演仲なか辛いが、兵隊さんの喜ぶ顔

に張り切る、揚子江の軍橋を見学、十九勇士の墓に参詣、遺品らしき物供え有りて涙あり、橋の中央部開閉に手伝う、支那の船頭さんの舟が通つて行く、涙なしで見られない情景である。

此の橋を造つた水戸の工兵隊と、渡つて行つた皇軍の姿を思う、兵隊さんから子供の幼稚園に送金を依頼され、親子の情愛にほつとする。

三月二十九日

杭州に向かつて七時間の汽車の旅、討匪に向かう二十名程の勇士等と、車中元気に合唱、四時着、氣候温暖なれど砂塵激しく吹き巻くる、休む間もなく公演、周囲の山に残敵ありと聞く。

三月三十日

五十万円で戦塵を逃れた太古の周幽、又絶佳なり、しばし戦いを忘れる、此の日支那人経営の女郎屋を見る、汚くて情もわくまない。

三月三十一日

病院にて公演、傷病兵を見舞う、皆泣き出してしまふ、「元気ですか」と尋ねる、皆「元気で有ります」と、威勢の良い声で返事をくれる、其の後映画館で公演、広い会場なので、声の限り歌う、昼食の時兵隊さんが地方の民謡を歌う、胸一杯となり涙が込みあげて泣き出す、皆スランプのようになって居る。

此の時大館中学校のじんじょう先生伍長殿が訪ねてくれる、大陸で大中精神を見られるとは予想外であった。

四月二日

九時、モーター車で南京に向かう、八時間も揺れる、車窓から人骨、馬骨を見る、車内で愛国行進曲などを合唱すれど、疲労と寝不足で厳しい気分になり落ち込む、首都南京は高層な建物軒並みに多し、雨降りて蓬萊館なる旅館にはいる。

四月三日

旅館で我等慰問隊にも南京虫の襲来、一睡も出来ない、朝五時出発、第一線部隊の慰問に向かう、鉄橋が破壊され二時間遅れる、メイコー駅で下り、車にてギンズイ閣へ、無事公演終わる、夜此処でも南京虫で眠れず。

四月四日

朝の公演三千人程で会場に入らず、中と外で三度でこなし、コウ陽に向かう、慰問隊は始めの事で喜んでくれる。

第二師団萩須閣下始め将校達の酒の宴によばれる、閣下よりの賞賛の詞に嬉し泣き、疲れを忘れる、夜焚火すれば、月も星も其の眺め格別なり、しばし里心となりて姑娘集えよ、日本の兵隊さんは優しいよ、愛情が深いよと、優しく聞かせてやりたい心境となる。

四月五日

前線慰問も終わって、青空一座は南京へ、そしてシヨーコへ向かう、強行軍に愈々疲れる、前日の露天公演と司令官の詞の感激と興奮が残っている、南京の夜はビールで乾杯、杯を重ねる程に酔

いて泣きたくなる夜だった。

四月六日

南京五時起床、シヨーコの町は戦過大なると聞く、大きな町は空襲で殆ど全滅、七時公演、討伐帰りの兵隊さん非常に喜んでくれる、明日はワンシテンだ。

四月七日

シヨーコから前線のワンシテンに向かう、途中危険箇所ありと護衛兵十名付添う、女子は乗用車、我々はトラックに便乗す、沿道に黄色の菜の花や蓮華草が咲き、これが戦場かと思うが、処所に死骸あり驚く、大陸の晩春は、真夏のように暑い、汗だくで公演を終わる、寝につく。

四月八日

珍しく雨だ、第三野戦病院に入る、大倉庫の仮舞台、連絡悪く聴衆少なし、白衣の勇士多数、病院長、いなば部隊長、くらはら隊長非常な好感をもって迎えてくれる、終了後直ちに南京に向かう。

四月九日

午前中戦跡見学、第一ユーカー門、脇坂部隊入城で物凄い激戦の跡を見る、三時より病院にて公演、待望大会堂二万人大合唱を行う。

四月十日

チンカオに向かう、南京迄と張り切った軀が、緩んだ弓の蔓のよ

うだ、日本の温泉地のような町だが、汽車の二時間で、病人のように消沈せるも、早速兵站到挨拶。

此処には秋田、青森、山形、福島県の兵隊が多い、懐かしいようなものだ、敏よ元気を出せ。

四月十一日

朝、甘露禪寺見学、安倍の仲麿が故郷を偲んで詠んだ『天の原ふりさけ見れば』の由緒ある地、一時から二回の公演、みんな良く頑張る、夜司令部幹部より御馳走になり、十一時就寝。

四月十三日

常州行きのガソリンカーに乗る、一時間半苦しみどうし、常州着、台湾部隊明日前線に出陣と聞く、勇躍出演、昨夜の疲れ取れず、僕は全然だめ。

四月十四日

朝心地良し、早起とになる、戦跡特に無し、只し支那の戦線で見える月は素晴しく絶佳、毎日の酒宴も少々あきた、明日は無錫行きだ。

四月十六日

松江砲兵少佐の心配で無錫迄自動車に乗る、苦戦の砲台陣地を見る、眼下に揚子江を望む、流れに軍艦あり、工兵戦死者の墓を参る、四時無錫に着く、太湖に近く、二十八万の場内人口を要する工業の町だ。

四月十七日

朝十時より公演の為早起き、無事午前の公演を終わる、二回目も早く終わって、太湖見学、外苑から見る太湖は十和田湖を見るが如く素晴らしい、船にて遊ぶ、湖上より見る岩壁の眺め絶佳、帰り帆船に乗る、是れ又よし、クリークから無錫への眺めを満喫す。

四月十八日

今日の公演で軍の方からポリドールレコード万歳の発声を頂く、真に有り難く感激して無事終了、支部長大河原氏の招宴にて全く酔払い、なにか悪口を言ったらしい、調子に乗るな、敏よ少し慎め。

四月十九日

十一時より野戦病院で公演、武内院長喜んでくれる、今日の調子は上の部だ、二時後、蘇州に向かう、四時着、兵站部に挨拶に廻る、明日の為今宵は満を待して寝に入る。

四月二十一日

一日中蘇州城内外見学、夜、森部隊にて公演、突然討伐命令ありて出勤、観衆少なし、伍長一名負傷との事、我等も興奮するが、戦果ありで喜びの宴をやる。

四月二十二日

佐藤部隊とも別れて懐かしの上海に帰る、日本に帰って来ような気がする。

四月二十三日

午前中は無為に過ごす、四時最後の公演、是れも予定外なるも、

懇請に負けての公演だ、倉庫に三千人程の大入りだ、皆最後と思
い大いに張り切る。

四月二十五日

上海気分を満喫すべく待機、写真機を購入、大東放送の高木氏の
案内で、パラマウント・ホールに遊ぶ、日本人はセンチで気味悪
く思われているが、度胸を決めて支那ダンサーと踊る、素晴らしい
ホールで踊るも意義深し、上海での気分良し。

四月二十六日

大東放送の願いもあり、夜七時より放送を決定、満を待して
悠々、放送は五十分間也、染千代「銃後だより」「会津磐梯さ
ん」、みゆき「好いて好かれて」「にくいわね」、敏「妻恋道中」
「南京だより」、割合元気だ、上海での放送も一汐感激ものだ、敏
最後に別れの言葉、「一ヶ月の慰問もやっと終わりました、だが
戦地の兵隊さんは皆元気であったと、銃後へ伝えます、皆さんも
元気をお願いします」と、愛国行進曲で終わる、非常に意義ある
日を過ごす。

(参考資料)

※左の手紙は昭和一三年三月二三日に上海から家族宛てて書いたも
ので、慰問日記と同様に大館上原敏の会創立十周年記念誌『歌
手上原敏 彗星のごとく』に収録されている。日記と同様に原
本は不明である。

上海呉淞路岸に着いた、遠く上海の平坦な地がカーキ色の揚柳に薄
ぼけて見える、揚子江支流の岸だ相だが船舶には将に朝の仕事に向
ふ苦力を乗せて、私達には何か未だ無気味に思はれる、中支幹部の
兵隊さんが見えて初めて安堵した次第、

船酔の中に上陸第一回が中支幹部演芸場にて直ぐ七時よりとの報に
驚いては見たが、之ぞ使命と張り切る、

第一回のステージに昂奮して居る、中支幹部、陽焦けた真赤な顔
が揺れて居る、船酔ひに揺れて居る、だが大きな爆発的な拍手と哄
笑に酔ひも忘れて大声を出す、それも忘れて、

二時、渡辺兵站南市支部、南市、此処は抗日排日の本拠なる由、先
づ戦歿勇士の納骨堂に参詣、三千人位の兵隊さんが居る大演芸場、
妙にヒステリックになつて居る、一行愛国行進曲と露営の唄を元氣
の好い兵隊さんと合唱した時は遂に感激の涙が出て仕舞つた、泣き
出して仕舞つた、

(後記)

新井勝紘による「講演録」は、平成二六年一〇月一七日から一〇
月二六日にかけて今村力三郎記念ホール（専修大学神田校舎八号館
二階）において開催した「太平洋に散った人気歌手・上原敏没後七
〇年記念展」の記念講演会（一〇月一八日実施）における講演を
反訳したものに、改めて加筆・修正を施したものである。

また「史料紹介」はこの会場にて展示した上原敏の手による軍事郵便を大学史資料課・瀬戸口龍一が翻刻したものである。

この展示および講演は、平成二六年度の科学研究費助成事業・基盤研究（C）「文系私立大学における学徒出陣の基礎的研究」（課題番号26370800 研究代表者：新井勝紘（専修大学文学部教授））の成果によるものである。